

令和4年度 大阪市立梅南中学校のあゆみ —結果概要とその分析から見えてきた成果・課題と今後の取組について—

大阪市教育委員会では、保護者や地域の皆様に説明責任を果たすことが重要であると考え、より一層教育に関心をお持ちいただき、教育活動にご協力いただくため、学校が各調査の結果や各調査結果から明らかになった現状等について公表するものとしています。

本校でも、各調査結果の分析を行い、これまでの成果や今後取り組むべき課題について明らかにし、本市教育委員会の方針に則り公表いたします。

なお、本調査により測定できるのは、学力の特定の一部であり、学校における教育活動の一側面に過ぎません。

1 「全国学力・学習状況調査」の調査の目的

義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図るとともに、学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善に役立てる。さらに、そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

2-1 「中学生チャレンジテスト」の調査の目的

- (1) 大阪府教育委員会が、府内における生徒の学力を把握・分析することにより、大阪の生徒課題の改善に向けた教育施策及び教育の成果と課題を検証し、その改善を図る。加えて、調査結果を活用し、大阪府公立高等学校入学者選抜における評定の公平性の担保に資する資料を作成し、市町村教育委員会及び学校に提供する。
- (2) 市町村教育委員会や学校が、府内全体の状況との関係において、生徒の課題改善に向けた教育施策及び教育の成果と課題を検証し、その改善を図るとともに、そのような取組を通じて、学力向上のためのPDCAサイクルを確立する。
- (3) 学校が、生徒の学力を把握し、生徒への教育指導の改善を図る。
- (4) 生徒一人ひとりが、自らの学習到達状況を正しく理解することにより、自らの学力に目標を持ち、また、その向上への意欲を高める。

2-2 「大阪市版チャレンジテストplus」の調査の目的

- (1) 生徒及び保護者が、学習理解度及び学習状況等を知り、目標をもって主体的に学習に取り組めるようにする。
- (2) 学校が生徒一人ひとりの学力を的確に把握し、学習指導の改善及び進路指導に活用する。
- (3) 学びの連続性を確立する観点から、客観的・経年的なデータを把握、分析し、効果的な指導方法や課題を「見える化」し、その改善に役立てる。

3 「大阪市英語力調査（GTEC）」の調査の目的

- (1) グローバル社会において活躍し貢献できる人材の育成をめざし、生徒の英語力の充実・向上を図るため、本市教育振興基本計画に基づき、生徒に求められる英語力や学習の習熟過程等を把握・検証する。
- (2) 生徒が自らの英語力を的確に把握するとともに、生徒の英語力の実態を分析することにより、各学校における学習指導の充実や改善、工夫に役立てる。

4 「全国体力・運動能力、運動習慣等調査」の調査の目的

- (1) 子供の体力・運動能力等の状況に鑑み、国が全国的な子供の体力・運動能力の状況を把握・分析することにより、子供の体力・運動能力の向上に係る施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。
- (2) 各教育委員会、各国公立学校が全国的な状況との関係において自らの子供の体力・運動能力の向上に係る施策の成果と課題を把握し、その改善を図るとともに、そのような取組を通じて、子供の体力・運動能力の向上に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。
- (3) 各国公立学校が各児童生徒の体力・運動能力や運動習慣、生活習慣、食習慣等を把握し、学校における体育・健康等に関する指導などの改善に役立てる。

1 全国学力・学習状況調査

学年 実施月日		生徒数 (人)	平均正答率(%)			平均無解答率(%)		
			国語	数学	理科	国語	数学	理科
3 年	学校	45	64	42	41	4.5	14.8	4.9
	大阪市	—	66	50	46	5.5	12.2	4.4
4月19日	全国	—	69.0	51.4	49.3	4.3	10.8	3.4

2 中学生チャレンジテスト

学年 実施月日		生徒数 (人)	平均点(点)					平均無解答率(%)				
			国語	社会※	数学	理科※	英語	国語	社会※	数学	理科※	英語
3 年	学校	41	49.9	44.7	48.5	43.9	43.5	13.3	4.5	9.1	5.9	9.5
	大阪市	—	53.4	54.7	54.9	55.8	53.7	11.8	4.3	9.7	5.3	6.8
9月6日	大阪府	—	53.8	55.4	56.0	55.9	54.2	12.1	4.6	9.6	5.8	7.1
2 年	学校	42	54.7	41.8	44.6	47.2	51.6	8.7	4.9	20.5	10.9	9.3
	大阪市	—	58.7	44.6	48.1	53.0	55.2	8.6	5.9	15.8	8.8	6.4
1月11日	大阪府	—	59.6	44.4	49.0	52.9	56.1	8.5	6.3	16.1	9.3	6.5
1 年	学校	31	56.9	53.2	51.9	59.2	51.0	15.5	6.2	12.6	4.7	7.9
	大阪市	—	57.8	51.8	54.2	55.0	58.3	12.1	4.9	7.6	5.3	5.1
1月11日	大阪府	—	58.6	51.8	55.0	55.0	59.1	12.5	—	8.0	—	5.3

※ 1年生の社会・理科については、「大阪市版チャレンジテストplus」として実施

※

※ 2年生の社会はA問題を選択 2年生の理科はA問題を選択

※ 3年生の理科はC問題を選択

3 大阪市英語力調査 (GTEC)

学年 実施月日		生徒数 (人)	読むこと 【リーディング】	聞くこと 【リスニング】	書くこと 【ライティング】	話すこと 【スピーキング】
			(スコア)	(スコア)	(スコア)	(スコア)
3 年	学校	42	89.8	91.2	126.7	85.6
10月27日	大阪市	—	102.8	105.4	152.4	96.6

4 全国体力・運動能力、運動習慣等調査

学年	生徒数 (人)	握力 (kg)	上体 起こし (数)	長座 体前屈 (cm)	反復 横とび (点)	20m シャトル ラン (回)	持久走 男子1500m 女子1000m (秒)	50m走 (秒)	立ち 幅とび (cm)	ハンドボール 投げ (m)	体力 合計点 (点)
	44										
2 年 子 男	学校	28.00	32.05	49.47	57.53	89.35	—	7.44	211.11	24.65	49.69
	大阪市	28.88	26.10	42.66	51.66	77.74	—	8.08	196.13	19.98	40.80
	全 国	28.99	25.74	43.87	51.05	78.07	—	8.06	196.89	20.28	41.04
2 年 子 女	学校	21.72	21.40	47.32	46.88	43.59	—	9.24	166.36	12.24	45.48
	大阪市	23.08	21.91	45.40	46.34	51.72	—	9.07	166.28	12.26	47.00
	全 国	23.21	21.67	46.07	45.81	51.60	—	8.96	167.04	12.45	47.42

令和4年度 大阪市立梅南中学校のあゆみ —結果概要とその分析から見えてきた成果・課題と今後の取組について—

全国学力・学習状況調査

【成果と課題】

＜国語＞

「話すこと・聞くこと・読むこと」において全国平均を下回ったが、「書くこと」においては全国平均を上回った。また、書写の「行書の特徴」を問う問題では全国平均と比べ13ポイント上回った。自分の考えが伝わる文章になるよう根拠を明確にして書く問題も全国平均を上回ることができた。しかし、「スピーチ文の読み取り」に関しては全国平均を下回る結果となった。

＜数学＞

「関数」領域の「一次関数の変化の割合の意味の理解度」を問う設問の正答率は全国平均を上回った。一方、「数と式」領域や「図形」領域の設問の正答率は全国平均、大阪府平均と比較して大きく下回った。

＜理科＞

全国の平均正答率と比べ、本校は「粒子」と「生命」の分野で差が大きく開いた。「粒子」の中でも特に化学変化を苦手としている様子が見られた。また、記述形式や実験の仮設・検証においても課題が見つかったため、今後演習等を積み重ねていく。

【今後に向けて】

＜国語＞

今回の結果を通して、「書くこと」に関しては問題に前向きに取り組み、正答率もよかったが、「話すこと・聞くこと」に関する問題においては苦手意識がみられるので、スピーチの場を設けて学力の向上を目指していきたい。また、日々の授業の中で小テストをおこない知識の定着をはかっていく。

＜数学＞

演習の時間を多く確保することで、入試問題の基盤となる基礎計算力の向上を目指す。同時に、暗記だけでは対応できない関数や図形の単元で必要となる数学的思考力や論理的思考力を育む必要がある。具体的には、自分の考えを記述したり、事柄が成り立つ理由を説明させる学習場面を増やす。

＜理科＞

各分野単元終了後の演習問題において、記述式問題や実験を考察する問題の数を増やしていく。また、2月までには教科書の内容をすべて終了し、以降は1年生範囲から総復習を行っていく。授業スタイルを共同学習形式に変更し、生徒一人ひとりに合ったペースで、個人の課題を最大限に克服していく。

【成果と課題】

<国語>

平均点は大阪府と比較して、3.9ポイント下回る結果となった。「我が国の言語文化に関する事項」においての得点率は、大阪府の平均に比べ、3.7ポイント上回る結果となった。「書くこと」に関しても、大阪府の平均と比べ0.8ポイント下回ったが、差を縮めることができた。しかし、記述式問題に関しては、大阪府の平均と比べ、8.5ポイントも下回ったので、ここに課題がみられる。

<社会>

平均点は大阪府と比較して、10.7ポイント下回る結果となった。評価の観点における得点率をみると、思考・判断・表現の観点では昨年府平均を14.3ポイント下回っていたが、今回は6.8ポイント下回る結果となり、府平均には届いていないものの、差を縮めることができた。一方、知識・技能の観点においては、府平均を11.9ポイント下回り、昨年度よりも差が開く結果となったことから、1、2年時の復習も日ごろから行っていく必要性を感じた。無解答率においてはわずかではあるが府平均を上回ることができたため、授業内の取り組みで、自分の意見を記述する機会を設けている成果が見られた。

<数学>

平均点は大阪府と比較して、7.5ポイント下回る結果となった。「正負の加法減法」「方程式を解くこと」においては府平均を2ポイント程度上回ったが、他の設問では府平均を下回っている。特に、「関数」「図形の証明」において20ポイント程度府平均を下回る設問もあった。基礎的計算力の向上のみでなく、「関数」「図形」「データの活用」などの単元を通して数学的思考力や判断力を育成する必要がある。

<理科>

平均点は大阪府と比較して12ポイント下回る結果となった。「エネルギー」「粒子」「生命」「地球」すべての領域において3ポイント程度下回っているため、学力の定着と底上げにより全領域における正答数を1つ増やすことを目標にする。また、短答式問題の無回答率が20～44%と目立ったため、文章作成の学習も行っていく。

<英語>

平均点は大阪府と比較して10.7ポイント下回る結果となった。「書くこと」において無解答が多かったり、大幅にポイントが下回っていたりするため、基礎学力の定着や文章作成の学習等の課題が顕著になった。「読むこと」においては、府平均との差の開きがわずかであったため、内容理解においては普段の授業内での取り組みの成果が見られた。

【今後に向けて】

＜国語＞

単元テストを多くとりいれ、学力の定着を図る。また、記述問題に課題がみられるので、引き続き書く練習を行い、無解答率をさげる。

＜社会＞

現在も実施している授業内における小テスト、単元ごとに実施する中テストを継続して実施するとともに、1・2年生の復習も含め、さまざまな形式の問題に取り組む機会を設け、対応力を身につけていけるようにしたい。

＜数学＞

「関数」「図形」の範囲の1・2年生の復習を含め、この単元の演習を多く取り入れる。特に、「図形の証明」などを通して自分の考えを論理的に記述する練習も行う。それと同時に、各生徒の課題や習熟に合わせて入試問題に取り組ませる。

＜理科＞

小テスト形式のデジタル教材や演習問題を多くとりいれ、学力の定着を図る。また、記述の練習を行い、無解答率をさげる。

＜英語＞

これまで通り「読むこと」においては、早く読む練習も加える。「書くこと」を中心に、自分の意見を述べる機会を多く取り入れ、表現方法等の演習を行い、無解答率をさげる。

令和4年度 大阪市立梅南中学校のあゆみ —結果概要とその分析から見てきた成果・課題と今後の取組について—

GTEC

【成果と課題】

音読をする機会を多くとった結果、スピーキングにおいて少しずつスキルが伸びている。なじみのある表現や簡単なやり取りができる力はついてきている。

【今後に向けて】

単語や語句で表現する力はついてきているので、次は文章で表現することを目標としないといけない。ライティングでは、基本的な文をつなげて短い文章を書く力をつける必要がある。「いつ」「どこで」「なぜか」等、連想することからはじめる。リスニングでは、聞こえた単語のみから答えを導いている傾向にあるため、文章を聞く力を伸ばすことを目指す。

2年生 チャレンジテスト

【成果と課題】

<国語>

目標を1.0ポイント上回る結果となったが、大阪府の平均点と比較すると4.9点下回っている。特に「思考・判断・表現」の領域での大阪府との差が大きい。評価できる点は、1問だけではあるが全員正解できたことと、無回答率0%の問題が13問あり、一人一人が真剣に問題に取り組んだ姿勢がうかがえる。また朝学習や授業の導入時に取り組んだ、漢字の書き問題や、古典の問題に関しては、大阪府平均を上回る結果となっている。

<社会>

昨年度より大きく下回る結果となった。内訳をみると、特に対市比で1.0を下回る学力帯の生徒がさらに結果を下げた形となっている。これは問題が高難度であったことで、できる問題自体が少なくなってしまったことが大きく影響していると考えられる。特に高学力帯の生徒に関しては昨年と同程度か昨年を上回る結果を出している生徒が多く、考えることができるものにとっては良い結果になったと考えられる。以上のことから、主に中～低学力帯生徒へのアプローチが必要であると考え、特に「読み解く力」＝読解力が今後重要になってくると考える。

<数学>

平均点は4.4点下回り、目標を5.8ポイント下回る結果となった。大阪府と比べると、全学年に共通して、記述式の問題や思考・判断・表現の力を問う問題の得点率が低く、その問題の無回答率が高い傾向にある。知識・技能を問う問題については得点率が大阪府を上回るものも見受けられる。

<理科>

普段の授業では学んだ内容を振り返るプリント活動を行ったり、チャレンジテスト直前には過去の問題を使用し練習を行ったり、知識の定着のためゲーム形式での取り組みを行ったが、その結果目標を3.1ポイント下回る結果となった。

<英語>

平均点は大阪府と比較して4.5下回る結果となった。「聞くこと」、「読むこと」、「話すこと」、「書くこと」の各領域において全体的に大阪府を下回る結果であった。記述式問題の無回答率が大阪府平均と比べて高かった。

【今後に向けて】

＜国語＞

「思考・判断・表現」の観点の力がまだついていないので、授業の中で、自分の意見を発表する取り組みや、作文に取り組む時間を増やしていく。重点を置いて学習した漢字の書きや古典の分野は力がついてきているので、更に継続して朝学習の時間などを使って取り組んでいく。「天声人語」を毎週写すという取り組みをする中で、漢字の読み書き、作文の書き方、読解の力などがついてきているので、来年度も継続していく。

＜社会＞

全学年を通して中～低学力帯生徒の学力の向上、特に「読み解く力」の育成に取り組む必要がある。そのためには、まず知識の定着が必要であると考えられるため、来年度も毎授業での小テスト、單元ごとの中テストを行い知識の定着を図りつつ、その知識を応用して問題を「読み解く力」を養うために、資料の活用や、会話文の読み取り問題などに触れる機会を増やしていきたい。

＜数学＞

普段の学習活動が単に知識・技能の習得にならないようにする必要がある。知識・技能を活用する問題などに触れる機会を増やし、数学的な表現を用いて論理的に考察したり、その過程を振り返って考えを深めたりすることが求められる。

＜理科＞

基礎・活用や領域、問題形式などの分類に注目すると全体的に市の正答率より0.4から3.6ポイント下回っている結果から、まずは知識定着を行うことを意識して、段階を踏んで記述や活用する活動を授業に組み込んでいきたい。。

＜英語＞

各学年の状況を踏まえ、より一層教科指導に力を入れていく。また、帯活動やアクティビティ、プレゼンテーション、パフォーマンステストを実施し、4技能の向上に努めていく。

【成果と課題】

＜国語＞

目標を1.5ポイント上回る結果となったが、受験者数が31名で学年全体の約74%しか受験していないため学年の力とは言い難い。また、大阪府の平均点と比較すると1.7点届いていない。課題は小学校で学習した漢字の読み書きができていないことである。他の項目と比較すると正答率が低く、無回答率が目立った。評価できる点は2点あり、1つ目は無回答率0%の問題が10問あったことである。2つ目は古典の問題の正答率がいずれも50%以上で、そのうち2問が大阪府平均を上回る結果となったことである。

＜社会＞

経年調査よりわずかであるが下回る結果となった。内訳をみると、歴史的分野では市平均を大きく上回っているが地理的分野において市平均を下回っている。また、記述型の解答形式の問題においては市平均を10ポイント以上下回っていることから、知識の定着はみられるものの、知識を応用して表現する力が低いことが考えられる。資料や問題文から「読み解く力」の育成が重要となってくる。

＜数学＞

平均点は3.1点下回り、目標を1.2ポイント下回る結果となった。大阪府と比べると、全学年に共通して、記述式の問題や思考・判断・表現の力を問う問題の得点率が低く、その問題の無回答率が高い傾向にある。知識・技能を問う問題については得点率が大阪府を上回るものも見受けられる。

＜理科＞

普段の授業では学んだ内容を振り返るプリント活動を行ったり、チャレンジテスト直前には過去の問題を使用し練習を行ったり、基礎知識の定着のためにデジタルドリルを使用した課題を行った。その結果目標を5ポイント上回る結果となった。基礎・活用や領域に注目すると市の正答率より基礎は2.5ポイント、活用が10.9ポイント上回る結果となった。

＜英語＞

平均点は大阪府と比較して8.1下回る結果となった。「読むこと」の領域において、大阪府と比較し、4.5下回る結果となった。文章を読む練習を継続して行う必要がある。また、記述式の無回答率が高かった。

【今後に向けて】

＜国語＞

全体として目立ってできていない項目はなく、基礎的な力については、問題演習を重ねて「思考・判断・表現」の観点での問題にも対応できる力を向上させていきたい。その中で小学校で学習した漢字の確認や復習も織り交ぜていく。また、古典の正答率が高かったので、維持できるよう普段の授業から基礎の確認や問題演習を取り入れる。50点未満の生徒層が全体の35%を占めているので、この層の得点力向上が、学年平均を上げることにつながると考えられる。

＜社会＞

全学年を通して中～低学力帯生徒の学力の向上、特に「読み解く力」の育成に取り組む必要がある。そのためには、まず知識の定着が必要であると考えられるため、来年度も毎授業での小テスト、単元ごとの中テストを行い知識の定着を図りつつ、その知識を応用して問題を「読み解く力」を養うために、資料の活用や、会話文の読み取り問題などに触れる機会を増やしていきたい。

＜数学＞

普段の学習活動が単に知識・技能の習得にならないようにする必要がある。知識・技能を活用する問題などに触れる機会を増やし、数学的な表現を用いて論理的に考察したり、その過程を振り返って考えを深めたりすることが求められる。

＜理科＞

解答形式注目すると記述の形式での正答率が市よりも4ポイント下回っていることから、実験などの活動を通して、記述での回答を普段の授業から意識的に行っていきたい。

＜英語＞

各学年の状況を踏まえ、より一層教科指導に力を入れていく。また、帯活動やアクティビティ、プレゼンテーション、パフォーマンステストを実施し、4技能の向上に努めていく。